

集落における空間構成上の特性 (その2) —沿海集落における高密度集住を支える空間構造—

日大生産工 (研) ○尾川陽一 日大生産工 (院) 山本健司
日大生産工 宮崎隆昌

1. はじめに

前稿では、沿海集落を対象に個と集団の「距離感覚」と空間構造の関係性について、住居単位を中心に検討した。本稿 (その2) では既往研究¹⁾ での対象地である離島集落と同じ地域の沿海集落を対象に、集住単位・環境単位における「距離感覚」の輻輳関係を検討する。

2. 日常生活での行為からみる「距離感覚」

屋外空間での行為観測調査を実施し、生産・生活・交流の実態を把握する。沿海集落での磯・浜は①漁業生産作業の場②水産物の荷捌きの場 (搬出入) ③漁業共同組合の場④漁業に関する準備・打ち合わせ等を通じた交流の場⑤漁船に係留する場等の機能を有し、生産・生活・

交流の場として大きな役割を果たす。

そこで磯・浜に面する地区をA地区 (磯・浜が2方向ある場合には漁協と反対側をA'地区)、店舗等がある地区をB地区、背後に山・崖等がある最奥地区をC地区とする (Fig.1-1, Fig.1-2)。

金・高橋 (1995) によると、J.ゲールは屋外空間での人々の行為を「社会行為・任意行為・必要行為」に分類している²⁾。社会行為が多いほど空間は活用され、活気ある空間であるとしている。本研究では、それらを参考に屋外空間での行為をTab.1のように分類する。

両集落の各地区で観察した行為の総数と行為内容をFig.2-1, Fig2-2に示す。

阿曽浦で行為数が最も多いのはA'地区で、次



Fig.3 漁業活動を通しての交流 (A 地区)



Fig.4 漁業生産と交流の様子 (B 地区)

Tab.1 行為分類

必要行為	移動	歩行 原付・自転車での移動
	滞留	洗濯等の家事 外流しでの生産行為 操業前後の準備・後始末 漁網の修理
任意行為	移動	散歩
	滞留	打ち水 植木等の鑑賞・手入れ 夕涼み・休憩
社会行為	移動	挨拶 歩行中の会話
	滞留	漁業に関する情報交換・打ち合わせ等の会話 世間話 2人以上の会話

The characteristics of Spatial composition in the villages (Part2)
-The spatial structure support to dense population in coastal villages

Youichi OGAWA, Takamasa MIYAZAKI and Kenji YAMAMOTO

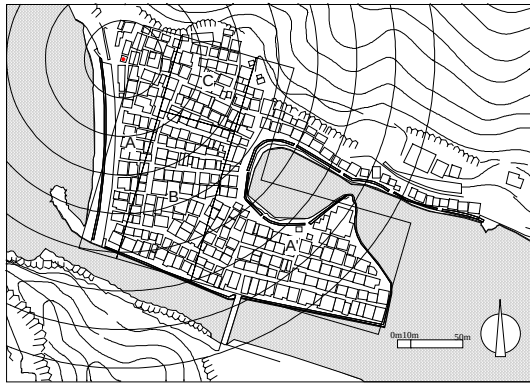


Fig.1-1 集落地図（阿曾浦）

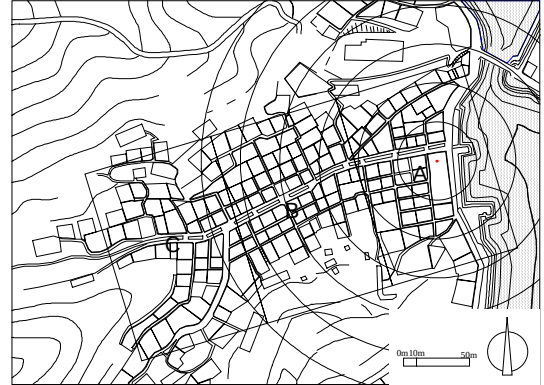


Fig.1-2 集落地図（相賀浦）

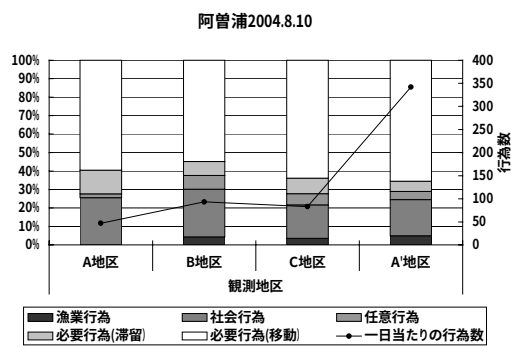


Fig.2-1 行為観測結果（阿曾浦）

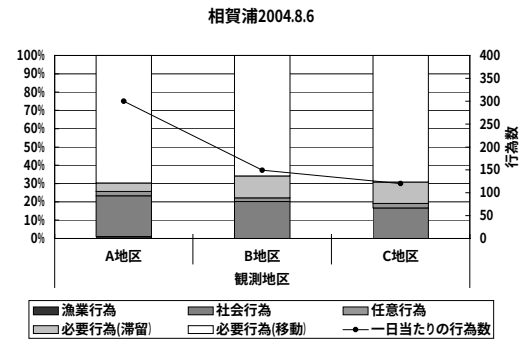


Fig.2-2 行為観測結果（相賀浦）

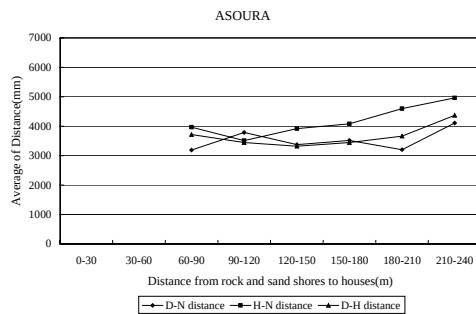


Fig.5-1 漁協から各住居までの距離と常態間距離（阿曾浦）

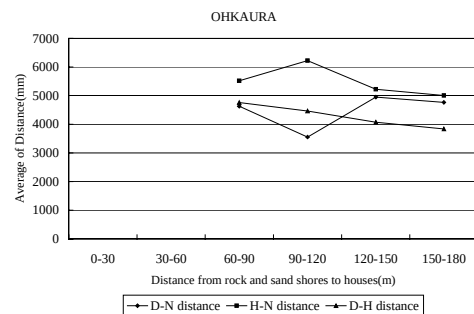


Fig.5-2 漁協から各住居までの距離と常態間距離（相賀浦）

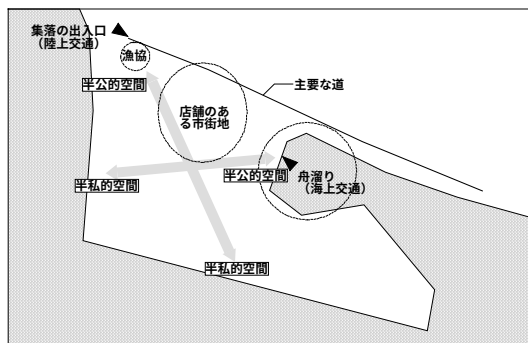


Fig.6-1 集落の概念図（阿曾浦）

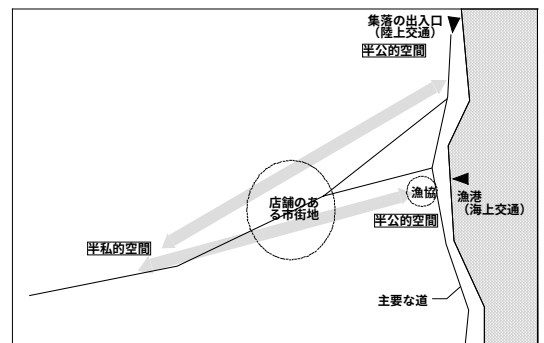


Fig.6-2 集落の概念図（相賀浦）

いでB地区、C地区、A地区の順である。社会行為はA地区、B地区でほぼ同数であり、C地区は最も少ない。

相賀浦で行為数が最も多いのはA地区で、次いでB地区、C地区の順である。社会行為はA地区で最も多く、次いでB地区、C地区の順である。これは地形的条件が類似している離島集落の菅島と同様の結果である。

両集落とも磯・浜に面する地区（A地区、A'地区）では漁港付近での会話や、漁業活動を通しての交流が多く見られた(Fig.3)。B地区では、店舗周辺での会話、玄関先で作業中に通りかかった人との会話等が見られた(Fig.4)。

以上、磯・浜は漁業活動や漁協付近の交流等、行為数が増加する要素が多く存在し、社会行為を誘発させている。磯・浜は生産・生活の中心のみならず、交流の中心としても機能し、離島集落で得られた知見とも一致する。

3. 集落内の各住居の位置と「距離感覚」の関係

漁業集落での磯・浜は多くの機能と役割を担っている。その中でも中核的な場である漁協を基点とした各住居の位置と常態間距離の関係を分析することで「距離感覚」の輻輳関係を考察する。漁協を0m地点として30m毎の同心円を想定し、漁協から各住居までの距離が同じ同心円内に含まれる住居において、各常態間距離の平均値を求める(Fig.1-1, Fig.1-2, Fig.5-1, Fig.5-2)。

阿曾浦では210-240m区域を除き、D-N, D-H距離（近隣住民と家族間の距離）は、3000～4000mm間を維持しており、集落全体が同等の「距離感覚」を有していると言える。

相賀浦では、漁協から120m区域内ではD-N距離はD-H距離に比べて短い、120m付近が変曲点となり長くなる。これは菅島との結果と同様に、世帯の独立性が高まることが影響していると考えられる。

以上の結果は行為観測調査とも関連している。阿曾浦では、三方が海に囲まれているため、

屋外空間の活発な地域が集落を囲んでいる。また、210-240m区域の常態間距離が比較的長いのは集落の端となっており屋外空間の行為が少ないためだと考えられる。相賀浦では、D-N距離が非常に短い90-120m区域には、店舗があり、屋外空間が活発である。

以上より、屋外空間が活発であるほどその地域の生活者は住居内での生活の中心の場を屋外空間に近接させていると考えられる。

4. 阿曾浦・相賀浦の集落構成の特性

阿曾浦・相賀浦では離島集落と同様、磯・浜が重要な役割を担っている。しかし、陸上交通もある阿曾浦・相賀浦では離島集落に比べて漁協の中心性が希薄となっている。

両集落の概念図をFig.6-1, Fig.6-2に示す。阿曾浦では主な漁業活動を行う舟溜りの漁港（海上交通の拠点）と漁協がある集落の出入り口（陸上交通の拠点）があり漁業生産の中心となる場が複数存在している。さらに、それらの中心に店舗等がある地域が位置するため、集落の大部分の屋外空間が活発であり、半公的空間の占める割合が高い。

相賀浦では漁港（海上交通の拠点）と集落の出入り口（陸上交通の拠点）が同じ海側にあるが同位置ではなく、集落の中心となる機能が二ヶ所ある。漁協付近の屋外空間は活発であり、さらに集落の出入口に直接通じる道と、集落の中央を通る道が合流する屋外空間（店舗等がある区域）も活発である。漁協は中心的な機能を有しているが、地形的条件が類似している離島集落の菅島と比べると、漁協の中心性が希薄となっている。

離島集落では海上交通のみのため漁港（磯・浜）が集落の中心として最も機能しているが、阿曾浦・相賀浦では陸上交通もあるため漁港の中心性が薄くなっている。そのため、漁港（磯・浜）を中心として捉え分析する離島集落の手法が阿曾浦・相賀浦では必ずしも充分とは言えず、

生産行為面（漁港市場）と生活行為面（漁協・店舗・公共施設）での二極分解している集落では輻輳した圏域構造となると考えられる。

5.総括

本研究では、離島集落とは異なる立地条件・空間構成である沿海集落を対象に、集住単位・環境単位の視点から個と集団の「距離感覚」について検討した。以下に得られた知見をまとめる。

- I：行為観測調査において、阿曾浦ではA'地区、相賀浦ではA地区で最も多く行為が観測でき、社会行為は両集落ともA地区で最も多い。
- II：阿曾浦ではD-N、D-H距離はほぼ同等であり、3000～4000mm（近隣住民と家族間の距離）の間を維持している。
- III：相賀浦では漁協から120m区域内の住居のD-N距離はD-H距離に比べて短い、120mを越えると長くなる。

阿曾浦・相賀浦では離島集落と同様に、磯・浜に近いほど屋外空間は活発化され、それに関連し、屋外空間が活発な地域の生活者は住居内での生活の中心の場を屋外空間に近接させる結果が得られた。離島集落では出入口が漁港だけであるため漁港の中心性が顕著に現れた。しかし、海上交通だけでなく、陸上交通もある阿曾浦・相賀浦では、阿曾浦の集落全体が持っている同等な「距離感覚」や、相賀浦の漁協（磯・浜）付近だけでなく店舗等のある区域での活発な屋外空間の行為等が観測でき、漁港（磯・浜）を中心として捉え分析する離島集落とは異なった現象が生じている。

謝辞

本論文を作成するにあたり、小柳涼君・赤塚麻由子さん・五十嵐彩子さん・稲葉遥さん・関根英貴君・吉井淳君・吉川奈緒美さん、阿曾浦・相賀浦の住民の皆様に御協力を頂きました。

尚、文部科学省・日本大学より平成13年～15年私立大学等経常費補助金特別補助・大学院重点特別経費・研究科分・学生分の助成を受けた事を感謝します。

文献

- 1)山本健司、宮崎隆昌：離島集落における空間構成上の特性と個と集団の「距離感覚」の関係性，日本建築学会計画系論文集，第583号，pp.9-16,2004.9
- 2)金栄爽、高橋鷹志：密集住宅地の「住戸郡」における路地と隙間の役割に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第469号，pp.87-96,1995.3
- 3)エドワード・ホール：かくれた次元，日高敏隆・佐藤信彦訳，みすず書房，1970
- 4)山本健司、宮崎隆昌：離島集落の各住居における収納と住居間距離の関係について-高密度住空間の各住居同士の「間合い」-，日本建築学会技術報告集，第18号，pp.257-262,2003.12
- 5)宗正敏、宮崎隆昌：沿岸漁村地域に於ける集落の構成と特性（志摩・熊野灘沿岸地域の整備計画に関する調査・研究その1），日本建築学会論文報告集，第270号，pp.117-125,1978.8
- 6)宗正敏、宮崎隆昌：沿岸漁村地域に於ける複合集落の典型的性格について（志摩・熊野灘沿岸地域の整備計画に関する調査・研究その2），日本建築学会論文報告集，第271号，pp.95-103,1978.9
- 7)大内宏友、宮崎隆昌、宗正敏、：漁協を中心にとらえた漁港と集落の圏域の構成に関する実証的研究-沿岸漁村地域における圏域の構成その1，日本建築学会計画系論文報告集，第369号，pp.72-81,1986.11
- 8)大内宏友、宮崎隆昌、宗正敏、：漁協を中心にとらえた漁港と集落の圏域の構成に関する実証的研究-沿岸漁村地域における圏域の構成その2，日本建築学会計画系論文報告集，第382号，pp.77-86,1987.12
- 9)仙田満、金城むつみ、尾関昭之介：建築の個体間距離に関する研究-住宅のデザインコードと外部空間計画-，日本建築学会計画系論文報告集，第423号，pp.41-48,1991.5
- 10)仙田満、矢田努、尾関昭之介：住み手の意識からみた建築の個体間距離-建築の個体間距離に関する研究（その2）-，日本建築学会計画系論文報告集，第435号，pp.33-40,1992.5